



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	船越長善「札幌近郊の墨絵」について
Author(s)	工藤, 義衛; 渡辺, 隆
Citation	北大植物園研究紀要, 10, 97-116
Issue Date	2010-10-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44055
Type	departmental bulletin paper
File Information	BBG10_003.pdf



船越長善「札幌近郊の墨絵」について

工藤 義衛ⁱ・渡辺 隆ⁱⁱ

はじめに

「札幌近郊の墨絵」は、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園が所蔵する北海道開拓使に所属した画工、船越長善が描いた 54 点の墨絵群で、明治初期の札幌とその近郊の状況を知る上で好適な資料として知られている。

本稿では、「札幌近郊の墨絵」の概要を紹介するとともに製作年代及び資料中に見られるアイヌ語由来の地名について若干の考察を加えることとしたい。第 4 章『「札幌近郊の墨絵」に見られるアイヌ語由来の地名について』は渡辺が、それ以外の部分は工藤が執筆した。

1. 「札幌近郊の墨絵」について

「札幌近郊の墨絵」（以下「墨絵」）は、先に述べたように 54 点の墨絵が軸装されたもので、所蔵している北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園の標本番号は 33024、33025 である。「墨絵」の寄贈者及び資料の履歴を示す資料は、ごく限られており、収蔵の詳しい経緯は明らかでない。「墨絵」の最も古い台帳は、北海道大学大学院農学研究科会計掛により作成された物品管理簿で、「異動年月日 昭和 42 年 5 月 10 日 巻物 画譜巻物 藤田とよ寄贈」となっている。資料名は「画譜巻物」となっており、「札幌近郊の墨絵」という現在の資料名は、収蔵後に与えられたものと考えられる（加藤 2001）。

船越長善は、開拓使の画工のなかで署名のある作品が残っている数少ない人物である。明治 6 年の札幌を描いた「北海道石狩州札幌地形見取図」¹ や「明治六年札幌市街之真景」² は、それぞれ『札幌区史』（札幌区役所 1911）、『新撰北海道史』（北海道編 1936 - 37）に掲載され、北海道史研究者には良く知られている。

「墨絵」について言及したのは、故高倉新一郎北海道大学名誉教授が最初である。『新北海道史』（北海道編 1971）の機関誌『新しい道史』（高倉 1975）や『挿絵に拾う北海道史』（高倉 1987）で、船越の履歴と「墨絵」に収録されている絵の表題を紹介し、その所在が広く知られるようになった。しかし、「墨絵」そのものは図示されなかったため、その名のみが知られ、注意されるに止まっていた。

その後、「札幌六景之内渡島街晴雪」（33024 - 04）が、『さっぽろ文庫』（札幌市教委編 1985、吉岡 1989）や『新札幌市史』（札幌市編 1991）で、明治初期の札幌市街中心部を描いた絵として紹介された。

平成 12 年、北海道大学の田島達也らにより、北海道大学大学院文学研究科のプロジェクト研究として「墨絵」を含む北海道大学農学部博物館所蔵の絵画資料の調査、検討が行われた（田島ほか 2001）。その際、白石恵理は「墨絵」などの船越長善の作品について「開拓使の絵師・船越長善とその作品について」として報告している（白石 2001）。同報告書には、小さいコマながらも「墨絵」全点が掲載され、ようやくその全容が公開されることとなった。

翌平成 13 年、北海道開拓記念館主催の特別展「描かれた北海道」で、「墨絵」の一部が展示、紹介された。「札幌近郊の墨絵」が、一般に公開されたのはこの特別展が初めてであった（北海道開拓記念館編 2002）。

平成 21 年 9 月、いしかり砂丘の風資料館においてテーマ展「絵画に見る明治初期の石狩」が開催され、「墨絵」のうち石狩川河口部を描いた「石狩湊同所出張所矢槍ヨリ見下シ」（33024 - 15）「石狩郡石狩湊川上ヨリ川下ヲ望

ⁱいしかり砂丘の風資料館

ⁱⁱアイヌ語地名研究会

(33024 - 16) が展示された。

2. 各巻の構成

「墨絵」の2巻のうち、標本番号 33024 は、中山峠からの風景で終わり、33025 は同じ中山峠から始まっている。ほとんどが墨一色の絵だが、彩色されたものが数点見られる。かなり完成度の高い絵と、筆致が大胆で、描き直しも見られる絵が混在している。後者には、一枚の紙に別の視点からの風景を描いたり、余白に人物を描いたものもある。最初、こうした絵は、洋画でいうエスキース、つまり習作のようなものかと考えたが、筆者らが検討した結果、これは現場で風景をスケッチする際に、視点を変える毎にメモ的に描き足していったものと推測した。

特徴的なのは「墨絵」のほとんどの絵に、山名、川名などの地名が、細かく記入されている点である。これらの地名は、アイヌ語由来と見られるものが多数を占めているが、アイヌ語地名については、別に項を設けて取り扱うこととする。

2巻の絵の配列には、地域的なまとまりと連続性が認められる。次に各巻ごとに構成と墨絵の概要をみてゆくことにする。

なお、本稿では、「墨絵」を紹介するにあたり、各巻ごとの絵に 01 から始まる番号を与えた。基本的には表題ごとに一番号としたが、無題であっても明らかに独立している絵には番号を与えている。そのため、高倉の資料紹介や田島らによる報告書とは絵の点数が異なっていることをお断りしておく。(表題一覧参照) 本文中では、絵の表題の後に標本番号及び絵番号を注記している。

①標本番号 33024

標本番号 33024 に収録されている絵は、地域的なまとまりから (A) 札幌市街 (B) 札幌西部、南部 (C) 札幌北部、石狩 (D) 豊平川筋から定山溪、(E) 中山峠付近からの風景の5部に分けることができる。

(A) 札幌市街 (33024 - 01 ~ 05)

「本庁ヨリ東一望」(33024 - 01) は、明治6年に建設され明治9年に焼失した開拓使本庁舎から東側を描いたものである。「七年四月廿四日エンカルシスヨリ眺望札幌ヲ望」(33024 - 02)、「明治七年四月廿六日寫 圓山村之内在モイワ東北面眺望之真圖」(33024 - 03) は、いずれも明治7年4月に藻岩山、円山から描いた札幌市街である。この絵は、明治初期の札幌市域の状況を知る上で極めて貴重な資料である。なお、表題にある「エンカルシス」は現在の藻岩山、「モイワ」は現在の円山のことである。

「札幌六景之内渡島街晴雪」(33024 - 04)、「札幌六景之内官廳暮散」(33024 - 05) は「札幌六景之内」とあるが、ほかの四景は残っていない。「渡島通」は、現在の中央区南一条通りで、画面向かって左側の洋館風の建物には「女学校」と書入れがある。女学校とは、現在の南一条西3丁目北側(現三越百貨店のある一角)にあった「開拓使女学校」のことである。この場所には、明治5年1月に脇本陣が建てられたが、明治8年に洋風に改築され、開拓使女学校となった。開拓使女学校は、明治5年9月東京芝増上寺の開拓使学校に併設され、明治8年8月に札幌に移転・開校したが、翌9年4月に閉校している(北海道編1989)。このことから、「札幌六景之内渡島街晴雪」(33024 - 04) は、明治8年から9年にかけての冬に描かれたものと推定される。女学校の手前の店舗は、店前に杉玉が掲げられ、店内には樽のようなものが積み上げられている様子が見える。酒屋であろうか。

「札幌六景之内官廳暮散」(33024 - 05) は、開拓使札幌本庁から帰宅する官員を描いたものだが、様々な服装が見られ、当時の風俗を考える上で興味深い。

(B) 札幌西部及び南部 (33024 - 06 ~ 09)

「後志州石狩州堺ヲタルナ井ノ大滝」(33024 - 06) は、現在の星置の滝、「札幌郡アシ、ヘツ水源大瀑布 高十丈横四丈 七年四月十四日真寫」(33024 - 07)、「札幌郡アシ、ヘツ水源三筋滝之内 高五丈位 羽、二丈五尺位」(33024 - 08)、「札幌郡アシ、ヘツ水源三筋瀑布之内 右之滝 高三丈位」(33024 - 09) は、現在のアシリベツの滝であろう。これらの絵は札幌近郊西部および南部の滝という点でまとめられたものと

考えられる。

(C) 札幌北部から石狩 (33024 - 10 ~ 16)

「札幌郡モイトウ之内東寄り」(33024 - 10) から「石狩郡石狩湊川上ヨリ川下ヲ望」(33024 - 16) までは、現在の札幌市東区のモエ沼、同茨戸、石狩市花畔、石狩川河口部で、札幌北部から石狩川河口部へと配列されている。

「明治六年十一月十六日雪中於初寒川尻ニテ鮭漁奇趣真寫」(33024 - 11) は、発寒川河口(川尻)つまり、発寒川と石狩川の合流点付近であろう。

「石狩湊同所出張所矢槍ヨリ見下シ」(33024 - 15)、「石狩郡石狩湊川上ヨリ川下ヲ望」(33024 - 16) には、石狩川右岸に「出張所」とある。これは「開拓使石狩出張所」のことだと解される。石狩出張所は、明治8年2月に「民事局石狩分署」と改称されており、描かれている季節が冬ではないことを考えると、船越が開拓使に入った明治6年の春から7年の秋までに描かれたものと推測される。

(D) 豊平川筋から定山溪 (33024 - 17 ~ 24)

「札幌郡豊平川上字シユウナ井ハロヤン真寫 穴ノ川口ト云」(33024 - 17) から「札幌郡豊平川上定山溪ヨリ川下十丁程」(33024 - 24) は、豊平川の中流部から次第に定山溪へと遡るかたちで配列されている。ただし、それぞれの描かれた年代がはっきりせず、一連のものとして製作されたかどうか明らかではない。

(E) 中山峠からの風景 (33024 - 25 ~ 27)

「ウス新道字中山峠ヨリケナシ上段ヲ望」(33024 - 25) から「明治六年十月九日サツホ川水源ウス新道ケナシ山下タンニ登テ東北諸山眺望真寫」(33024 - 27) は、中山峠付近から見た風景を集めている。配置としては、33024 - 24 までの定山溪行から、さらに足を伸ばした配列となっている。

②標本番号 33025

標本番号 33025 は、(A) 中山峠からの風景 (B) 札幌本道沿線 (C) 江別市内 (D) 夕張、樺戸など空知方面の4部で構成されている。

(A) 中山峠からの風景 (33025 - 01)

「明治六年十月十日ウス新道筋ケナシ岳下段ヨリ西方眺望真寫」(33025 - 01) は、中山峠から描いた絵で、この巻でここから描いた絵は、1点のみである。標本番号 33024 は、この中山峠からの絵で終わっていることから、本来は、「ウス新道字中山峠ヨリケナシ上段ヲ望」(33024 - 25) からの一連の絵としてまとめられていたものと考えられる。

それではなぜ、一連の絵としてまとめられていた絵が、巻を異にするという不自然なことになったのだろうか。もしかすると、墨絵を地域ごとにまとめ順序を決めた者と表装の担当者は、別な人物であるか、あるいは、墨絵の順序の決定と表装の間に時間差があったのかもしれない。

(B) 札幌本道沿線 (33025 - 02 ~ 12)

「札幌郡アシハヘツ」(33025 - 02) からは、アシハヘツ、ワッチ休泊所、千歳川駅、美々、トキサラムフ、トマコマイと札幌から苫小牧方面へ札幌本道を進むかたちに配列されている。札幌本道は、函館から室蘭を経由し札幌に至る道路で、明治5年3月に着工され明治6年6月に竣工している(平凡社編2000)。

このグループには、明治7年2月の樽前山噴火に伴うものが含まれているが、日時が前後して配列されており、間に噴火と直接関係のない絵が入るなど、特に噴火の絵や表題の日時を意識してまとめた形跡はない。

「千年郡千年川下流ヲサツトウ西南ヲ望、景色絶也、水流浅清シ、鷺鴨多」(33025 - 10) から「千年郡千年川下流字ヲサツトウ真景」(33025 - 12) は、明治初期の長都付近の様子を描いたものである。「千年郡千年川下流ヲサツトウ西南ヲ望、景色絶也、水流浅清シ、鷺鴨多」(33025 - 10) には、アイヌのウライが描かれているが、このような状態のウライを描いた絵は極めて珍しい。

(C) 江別市内 (33025 - 13 ~ 17)

「エベツフトヨリ南西一望」(33025 - 13) から「石狩川支流エヘツ川字サノイヘナ井土人雪中鮭漁真圖」(33025 - 17) は、江別市江別太など現在の江別市内から描いた絵である。

「石狩川支流エヘツ川字サノイヘナ井土人雪中鮭漁真圖」(33025 - 17) の「エヘツ川サノイヘナ井」は、江別川と早苗別川の合流点付近と推定される。描かれている漁夫の服装は、典型的なアイヌのものには見えないが、案外、これが実際のアイヌの漁夫の姿なのかもしれない。

(D) 夕張、樺戸など空知方面 (33025 - 18 ~ 27)

江別からさらに石狩川を遡り、夕張、樺戸など空知方面を描いた絵である。「空知土人飼熊ノ子」(33025 - 18) は、厳密に言えば空知地方の風景を描いているわけではないが、表題に「空知」とあったため、このグループの冒頭に配したのであろう。多くのアイヌ語地名が記載されているが、これについては、後述する。

3. 作者船越長善について

①経歴の概要

船越長善の経歴は、これまで河野常吉 (河野 1979)、橘文七 (橘編 1957)、高倉新一郎 (高倉 1976、1987)、吉岡道夫 (吉岡 1987)、三浦泰之 (三浦 2006)、白石恵理 (白石 2001) らによって取上げられている³。ここでは、これらを踏まえたうえで、特に開拓使時代の経歴と画業に焦点を絞って見てゆくこととしたい。

船越長善は、天保元 (1830) 年生まれ、明治 14 (1881) 年没。号は月江。南部藩御用絵師の川口月嶺に円山四条流を学んだ。

嘉永 3 (1850) 年に勘定方となり、5 年後の安政 2 年から 3 年にかけて南部藩の蝦夷地警護の一員として箱館に赴任している。帰国後は、新田奉行などを歴任し、慶応 3 (1867) 年田名部奉行となった (三浦 2006)。船越の測量技術は、こうした経歴のなかで、身につけていったものと考えられる。

明治 5 年 7 月 2 日に岩手県租税課検地御用掛となったが、その直後 7 月 18 日に岩手県を退職し、札幌を目指した。札幌には明治 5 年 8 月に到着し、翌 6 年 2 月に北海道開拓使に採用されている。その後、開拓風景の記録や測量、地図製作に携わり、明治 14 年に 51 才で札幌豊平の自宅で死去した。豪放磊落な性格で、酒を好み、黒田清隆、永山武四郎、堀基などの高官とも交流があったという。

②開拓使時代の船越長善

■明治 6 年

船越が北海道開拓使に採用されたのは、明治 6 年 2 月で「当分抱」の「地図掛」としてであった。船越が開拓使に就職したことについては、既に白石が指摘しているように、絵の兄弟子で、先に開拓使に就職していた川口月村の手引きがあったのかもしれない (白石 2001)。

船越が開拓使に採用された翌月の明治 6 年 3 月に長善画「北海道石狩州札幌地形見取図」が発行されている。その経緯について、「その年二月地図掛を拜命した船越長善は、その三月計画された市街地図をつくり、『北海道石狩札幌地形見取図』と題して木版で刊行した」とされている (北海道編 1971)。しかし、わずか 2 ヶ月間で木版の下絵を描き、版木を彫って印刷することが可能だろうか。船越と「北海道石狩州札幌地形見取図」の関わりについては、同図を開拓使が発行した経緯を含め、さらなる検討が必要であろう。

さて、船越は、明治 4 年 4 月に等外二等出仕として生産掛に配属され、さらに同年 6 月に物産局博物課 (兼製物課) に異動している⁴。当時、博物課には白野夏雲がいた⁵。白野は明治 4 年に開拓使入りし、鉱物、植物の調査で業績を上げ、明治 8 年に内務省に転じ明治 19 年に札幌に戻り札幌神社宮司も勤めた人物である (白野 1984)。博物課の前身である物産掛には、明治 4 年 11 月に配属されている。「墨絵」の「白野石ト

名ク夏雲ナルヘシ サツホロ川上 在定山水下半里」(33024 - 18)は、定山溪を開いた美泉常山が名づけた「白野石」に同僚だった白野夏雲をなぞらえたものであろう。

船越は、明治6年9月9日から民事局の「近村絵図取調御用」にかり出され⁶、翌月そのまま民事局勸農課所属となった⁷。「墨絵」には、「明治六年十月九日サツホロ川水源ウス新道ケナシ山下タンニ登テ東北諸山眺望真寫」(33024 - 27)、「明治六年十月十日ウス新道筋ケナシ岳下段ヨリ西方眺望真寫」(33025 - 01)など明治6年10月から11月にかけて中山峠付近や発寒川河口で描かれた絵がある。これらは「近村絵図取調御用」の時期にあたっており、測量業務の合間に描かれたものと考えられる。

翌7年2月には「積雪中測量格別勉勵」として船越に慰労金が支給されているが⁸、「明治六年十一月十六日雪中於初寒川尻ニテ鮭漁奇趣真寫」(33024 - 11)は、そうした降雪期の測量作業の様子を伝えている。

ところで、降雪期まで測量を行うという無理な日程となった原因は何だったのだろうか。船越が物産局から民事局に応援に行き、そのまま担当となった経緯を考えると、考えられる直接の原因は、人員不足であろう。また、明治6年11月に「札幌郡西部図」⁹が作成されており、これを11月中に仕上げなければならぬ事情が背景にあったのかもしれない。

■明治7年

明治7年2月8日に樽前山が噴火すると、その夜、札幌本庁から樽前山の噴火を遠望して「タルマイ噴火崩陥二月八日午後八時札幌ヨリ遠望」(33025 - 08)を描き、翌9日から14日まで出張を命じられた。出張中「二月十日午後四時トマコマイヨリ」(33025 - 07)、「甲戌二月十四日午前十一時千年郡イサリ野中ヲ望」(33025 - 09)を描いた。帰任後すぐに「胆振国勇払郡樽前岳噴火之図」(以下「樽前山噴火之図」)を作成している¹⁰。

「樽前岳噴火之図」のうち、二号「明治七年二月八日樽前山噴火破烈午後八時札幌庁下ヨリ遠望之図」は、「タルマイ噴火崩陥二月八日午後八時札幌ヨリ遠望」(33025 - 08)と、三号「明治七年二月九日午後二時三十分イサリヨリ樽前噴火鎮定遠望之図」は、「甲戌二月十四日午前十一時千年郡イサリ野中ヲ望」(3025 - 09)と、五号「明治七年二月十日午後四時三十分苦細ヨリ樽前噴火鎮定一望之図」は、「二月十日午後四時トマコマイヨリ」(33025 - 07)と全く構図が同じである。こうしてみると「樽前山噴火之図」は、「墨絵」に含まれるスケッチをもとに描かれたとみてよいであろう¹¹。

明治7年4月には「札幌郡アシ、ヘツ水源大瀑布 高十丈横四丈 七年四月十四日真寫」(33024 - 07)、「七年四月廿四日エンカルシスヨリ眺望札幌ヲ望」(33024 - 02)、「明治七年四月廿六日寫圓山村之内在モイフ東北面眺望之真圖」(33024 - 03)を描いている。また、11月には「札幌郡各村地図」を作成している¹²。

■明治8年

明治8年6月7日に「石狩川筋夕張空知樺戸方面に地理調査」のため出張し、高畑利宣が同行した¹³。出張から帰った後、6月27日に「事業多端之折柄格別勉勵」として慰労金が支給されている。この慰労金は、高畑利宣にも同時に支給されており、「事業多端之折柄格別勉勵」とは、この出張に対する評価であったことが判る¹⁴。

さらに出張後の9月には、高畑と連名で「夕張空知樺戸三郡山林川沢地理水理等調査及ヒ開拓見込上申」(以下「夕張他三郡復命書」)が作成されている(旭川市史編集会議編1993)。この「夕張他三郡復命書」は、夕張、空知、樺戸三郡各地の入植地として好適な場所について22条にわたってレポートしたものである。

一方「墨絵」では、33025 - 19～27がこの地域の絵である。両者を突き合わせてみると、「墨絵」に見られる特徴的なアイヌ語地名が必ずしも「夕張他三郡復命書」には登場せず、絵が明治8年6月の出張時に描かれたものかどうか断定はできない。

ただ、内容に強い関連性が見て取れるものはいくつかある。例えば第十九条「空知郡石狩川枝川字オタウスナイ」の項は、「空知郡ヲタウスナ井川上字ハンケシヨフヲマナイノ滝 高凡二丈余」(33025 - 19)、「空知郡字ヲタウスナ井川上 此小瀑布岩石炭脈鋳 高三丈位」(33025 - 20)に対応し、この条の挿図と

してみても違和感はない。また、第六条「夕張郡字フリノボリヨリ字クツタルベツ」の挿図としては「夕張郡字ヤヲケナ井ノホリヨリ東北眺望」(33025 - 23)が同様である。

明治8年11月10日に「札幌郡石狩川筋エヘツ野南面真圖」(33025 - 15)、「札幌郡對雁村先エヘツフト奇趣真圖」(33025 - 16)を描いている。「石狩川支流エヘツ川字サノイヘナ井土人雪中鮭漁真圖 十一月比盛之」(33025 - 17)は、場所も近く、季節も共通しており、一連のものであろうか。

明治9年の開拓使文書「札幌近傍山林三等区分ノ件」に「右明治七八兩年ノ内高畑利宣船越長善実地巡見取調ノ表外ニ絵図面二葉アリ」とある¹⁵。明治7年から8年にかけての船越の仕事伝えるものとして興味深い。このほか明治8年の何月かははっきりしないが、屯田兵開墾地の測量作業に従事したという¹⁶。これは翌9年に入地した山鼻屯田兵村のことであろうか。

■明治9年

明治9年は、6月から8月にかけては、主に江別対雁、真駒内ハツタルヘツに出張を繰り返し、8月22日には「ホロムイ太」に出張している。9月からは「勸業課御用ニ付近村出張」をしている¹⁷。出張の多くは、伐木の評価、調査で、船越は亡くなる前年の明治13年まで、こうした仕事に従事している。

■明治10年

明治10年2月、開拓使の機構改革に伴い、民事局地理課に異動し、3月には八等属に昇進した¹⁸。北海道大学北方資料室にある「石狩国石狩樺戸両郡之内志別方面見取図」¹⁹には、「調 八等属船越長善」とあり、この図は、船越が八等属となった明治10年3月以降に作成されたものと考えられる。この年8月には、官林の盗伐調査で志別山に出張している²⁰。同年12月には江別兵村の測量を行ったという(江別市1970)。

■明治11年から13年

明治10年以降亡くなるまで民事局地理課山林係に在籍した(三浦2006)。明治11年9月に開拓使画工として栗田鉄馬を採用するにあたり、試験官を務めたという(三浦2003)。死の前年の明治13年に官林払下げの実地検査を行った文書が残っている(札幌市編1987)。実地検査に関わる書類は、明治13年7月まで残っているが、この年、中風に罹り、翌14年2月に亡くなった。

白石が指摘したように、まさに「死去する前年まで、変ることなく未開地への出張・踏査を続けた。文字通り、探検の連続の一生」であった(白石2001)。

4. 「札幌近郊の墨絵」に見られるアイヌ語由来の地名について

ここでは、絵師船越長善が「墨絵」をスケッチした場所及びその視点にとらえた地名の位置と、その語源や由来を検討した。

「墨絵」に記載されているアイヌ語地名の表記について概観すると、案内などで接したアイヌから直接聞き取ったものらしく、比較的正確なものが多い。しかし、一部の地名については、取り違えなどがあったらしく、表記に疑問があるもの、その位置や解釈が難しいものがある。また、現在に伝わらない地名や現在とは別の場所を指しているケースが少なからず見られる。

例えば、「ラン子シリ」、「キモンタツコフ」、「中川山」、「エソマツ川」、「シユウナ井ハロヤン」などは、当時の史料に見えない地名で、現地を案内したアイヌから聞いたものと思われる。あるいは現在知られていない開拓使内部の資料などから得たものもあるのかもしれない。松浦武四郎の著作に見える地名と異なるもの、一致するものがあり、明治初期のアイヌ語地名資料として興味深い。

「墨絵」の特徴として、山については遠くを見渡すため、稜線や頂上など高いところから描いている点が挙げられる。最も高いところからスケッチしたのは、標高約1,160mの石狩と後志の国境のあたりからである。明治6年5月開拓使は、アメリカ人ワッソンを招いて全道の三角測量に着手しており、テイ子山、アサリ山とともに、石狩後

志国境のムイ子山も作業が行われたところで、山頂に至る踏み跡程度の道はあったものと推測される。この年10月に船越らも、定山溪周辺や中山峠周辺の調査を行っており、かなりの日時を費やしたのであろう。しかし、「墨絵」の中にこの測量隊を描いたものが見えない。測量の現地作業は既に終わっていたのだろう。また、後述するが、「墨絵」の地名とワッソンらの作成した測量図の地名とは一致するものが少ない。外国人技術者が率いる測量隊と船越らの関係はどのようなものであったのだろうか。

「墨絵」のタイトルに、「真図・真景・真写」と「眺望・望」の2種の記載がある。前者は写生に近く、後者は、山の高さが誇張されたもの、低い山が省略されているものがある。また、絵の中に山や川の地名を書き込んでいる点も特徴のひとつである。おそらく後日における地図作成等への活用を考慮してのことで、これらも単なる風景画と異なる点である。

さて、「墨絵」には、施設名も含め、134件の地名がある。本稿ではその中から、特に他の史料に見えない地名やそのままでは位置の特定が難しい地名を中心に検討を加えた。

1) 札幌及び石狩管内（石狩市、江別市、千歳市）

①エンカルシス、エンカルシへ、エンカル、モイワ

「七年四月廿四日エンカルシスヨリ眺望札幌ヲ望」(33024-02)

「明治七年四月廿六日寫 圓山村之内在モイワ東北面眺望之真圖」(33024-03)

「石狩川ヤウスハヨリ川上諸山ヲ望」(33024-14)

「札幌郡豊平川支流ニソマツフ川上 左三里半高凡十五丈余」(33024-22)

現在の藻岩山(531 m)は、アイヌが「エンカルシペ (inkar-usi-pe) 眺める・いつもする所・もの(山)」と呼んでいた山である。古くは、天保年間の今井八九郎による「蝦夷地里数書入地図」(高倉編1982)に「エンカルシ」とある。安政・万延年間では、「エンカルシペ」(『戌午日誌上』松浦1985)、「エンカルシペノホリ」(『松浦武四郎紀行集下』松浦1977)などに見える。

藻岩山の隣の円山は、もともと「モイワ (mo-iwa) 小さい・山」と呼ばれていたが、明治初期に円山と呼ばれるようになったようで、いつしかモイワの名は南隣りのエンカルシペ(現・藻岩山)に転称された。このことについては、『蝦夷語地名解』(永田1891)で指摘されており、その後『札幌のアイヌ語地名をたずねて』(山田1965)も船越長善らが明治6年に作成した「札幌郡西部図」²¹を引き、同図で藻岩山が「エカルシペ」、円山が「モイワ」と表記されていることを指摘している。

明治24年発行の「道庁20万分の1図」²²に「インカルシュベ山532、円山241」とあり、同29年の「複製5万分の1図」²³では、「墨絵」の「エンカルシへ」「エンカル」にあたる山を「藻岩山」、「モイワ」にあたる山を「円山」と表記している。なお、33024-02の表題にある「エンカルシス」は、他に同じ表記がなく、アイヌ語としても語釈が難しい。あるいは「エンカルシペ」の誤記なのかもしれない。

②タンネ手稲山、テイ子イ山、テイ子イ

「明治七年四月廿六日寫 圓山村之内在モイワ東北面眺望之真圖」(33024-03)

「石狩川ヤウスハヨリ川上諸山ヲ望」(33024-14)

「無題」(33024-26)

「エヘツフトヨリ南西一望」(33025-13)

「夕張郡字マライノホリヨリ西ノ方眺望」(33025-22)

いずれも手稲山(1,024 m)を指す。「テイネ」は、「テイネ (teyne) 湿る、湿った」と解される(中川1985)。また、『札幌地名考』(札幌市教委編1977)では「手稲北部の平野一帯は、手稲山から注ぐ数多くの小川が、集中して低湿地帯を構成していたため「テイネ」と呼ばれた」とされている。手稲山は、手稲の真上にある山のため、手稲山と呼ばれるようになったのであろう。

もともとアイヌは手稲山を、「タンネウエンシリ (tanne-wen-sir) 長い・悪い・山」と呼んでいた。これは「山

の東側から南側の頂上付近には岩壁が聳えており、昔この山で狩猟をしていたアイヌ達が、険しい岩壁に難儀した（『手稲山紀行』早川 2000）ことからこのような呼び方が生じたと考えられる。

③シユウナ井ハロヤン

「札幌郡豊平川上字シユウナ井ハロヤン真寫 穴ノ川口ト云」（33024-17）

絵の右下に洞窟のような穴が見え、パロ（paro）は「口」の意。藻岩山の南東、藻南公園のあたりか。

④サノイヘナ井

「石狩川支流エヘツ川字サノイヘナ井土人雪中鮭漁真圖」（33025-17）

江別市を流れる早苗別川。石狩川と千歳川の交流点から 1km ほど上流に南側から早苗別川が合流している。もとは『サノ ユベ（Sano・yube）「下ノ鮫川」』『「サノ」ハ「サノプト」（下方ノ口）』（永田 1891）とされる。石狩川と千歳川の合流点から 1km ほど上流に入った浄水場がある所に、南側から早苗別川が合流している。「石狩川支流エヘツ川字サノイヘナ井土人雪中鮭漁真図」（33025 - 17）は、この付近か。「大正 7 年 2 万 5 千分 1 地形図」²⁴ に、くねくねと湾曲している川筋が記載されていたが、現在の川の上流部はほぼ直線化され、南側の志文別まで続いている。

⑤イチャ、イチャノホリ

「明治六年十月九日サツホ川水源ウス新道ケナシ山下タンニ登テ東北諸山眺望真寫」（33024-27）

「甲戌二月十四日午前十一時 千年郡イサリ野中ヲ望」（33025-09）

支笏湖の北、恵庭岳（1,320 m）の北東に位置するイチャンコッペ山（829 m）か。山田秀三（1984）は、『イチャン・コロ・ペ（ican-kor-pe）「産卵場・を持っている・川」あるいは『イチャン・コッ・ペツ（ichan-kot-pe）「いわな・川」』のような意味でなはいかと推測している。

⑥アノロタルマイ岳、ヲフイノホリ

「甲戌二月十四日午前十一時 千年郡イサリ野中ヲ望」（33025-09）

この絵では、「アノロタルマイ岳・ヲフイノホリ」と併記している。いずれも樽前山（1,041 m）を指すと考えられる。アノロについて、知里真志保（1956,pp6）は、「an-rur あんルル 反対側の海にのぞむ地方；山向うの海辺の地。——太平洋岸のアイヌは日本海岸を、日本海岸のアイヌは太平洋岸を、それぞれ「あんルル」と呼ぶ。」と書いている。また、山田秀三（1984,pp61）は、「rur は海水で地名では海辺の意にも使われる」と述べており、アノロタルマイ岳は、「山向こうの海辺の樽前山（日本海岸のアイヌから見た）」の意と解釈できる。ヲフイノホリは、「ウフイ・ヌプリ（uhui-nupuri）燃える・山」で、樽前山が何度も噴火を繰り返し、噴煙を上げていたことからこの呼び名がある。

2) 後志管内

①ヲン子シリ

「明治六年十月十日ウス新道筋ケナシ岳下段ヨリ西方眺望真寫」（33025 - 01）では、中央に「マツ子シリ」、その左に尻別川を挟んで現在の尻別岳のところに山を描き「ヲン子シリ」と記している。この山名は、同年 11 月に飯嶋矩道と船越長善が共同で製作した「札幌郡西部図」も同様である。

山の名にオンネ（ヲンネ）を用いた例は希で、永田方正（1891）が「Onne nupuri オンネ ヌプリ 大山 斜里川ノ水源ナリ故ニ斜里岳トモ称ス」としているが、尻別岳を「ヲン子シリ」と書いた史料は、船越による「墨絵」と「札幌郡西部図」の他に類例を見ない。また、明治 6 年の『三角術測量北海道之図』²⁵ でも、同じ山にシリベツ岳の名が用いられている。なぜ船越が「ヲン子シリ」と書いたのか不可解である。

アイヌの人たちは、羊蹄山（1,892 m）をマツカリヌプリあるいはマツ子シリ、尻別岳（1,107 m）をピンネシリと呼んでいた。マツ子シリは、「マツネシリ（mat-ne-sir）女・である・山」、ピン子シリは、「ピンネシリ（pin-ne-sir）男・である・山」である。オンネ（onne）は「年とる。年寄りである。」の意味であるから、もしかすると船越が同行したアイヌに山の名を尋ねた際に、尻別岳について、羊蹄山に比べて古い山なので

「ヨン子シリ」と答えたのかもしれない。

なお、「明治六年十月九日サツホ川水源ウス新道ケナシ山下タンニ登テ東北諸山眺望真寫」(33024 - 27) 右下にある「シリヘツ水源」は、尻別川の水源で、羊蹄山や尻別岳を指している。シリベツ (sir-pet) は、「山の・川」である。

②ケナシ・ケナシ山・ケナシ岳

「石狩川ヤウスハヨリ川上諸山ヲ望」(33024 - 14)

「ウス新道字中山峠ヨリケナシ上段ヲ望此山今札幌郡後志國界」(33024 - 25)

「無題」(33024 - 26)

「明治六年十月九日サツホ川水源ウス新道ケナシ山下タンニ登テ東北諸山眺望真寫」(33024 - 27)

「明治六年十月十日ウス新道筋ケナシ岳下段ヨリ西方眺望真寫」(33025 - 01)

「夕張郡字マライノホリヨリ西ノ方眺望」(33025 - 22)

ケナシ (Kenas) は、アイヌ語の千歳方言では「川端の山が引込んで低くなり林になっている所」である(中川 1985)。「墨絵」に描かれたケナシ山は、6つあり、いずれも中山峠の東に描かれている。「エヘツフトヨリ南西一望」(33025 - 13)の「ケナシ」は「エベツフト」から、「夕張郡字マライノホリヨリ西ノ方眺望」(33025 - 22)の「ケナシ岳」は「マライノホリ」から遠望したもので、山の位置や形が曖昧であるが、無意根山(1,460 m)のあたりと思われる。

「無題」(33024 - 26)は、今の中山峠の北東7 kmの薄別川上流より北方向を眺望したもの。この絵の左端、山頂に柵のような岩壁を描き、「中タン」とあるのは、現在の中岳で、その右側の「ケナシ上ダン」は長尾山(1,211 m)、この山の手前に稜線が重なって見える山は無意根山にあたる。「ウス新道字中山峠ヨリケナシ上段ヲ望此山有札幌郡後志國界」(33024 - 25)と「明治六年十月九日サツホ川水源ウス新道ケナシ山下タンニ登テ東北諸山眺望真寫」(33024 - 27)の説明文にある「ケナシ」も無意根山であろう。「中タン」は中段、「上ダン」は上段の意と思われる。

なお、「明治六年十月十日 ウス新道筋ケナシ岳下段ヨリ西方眺望真寫」(33025 - 01)、「明治六年十月九日サツホ川水源ウス新道ケナシ山下タンニ登テ東北諸山眺望真寫」(33024 - 27)のスケッチ場所も、「無題」(33024 - 26)とほぼ同じである。

ところで不思議なことに「墨絵」には、無意根山の名が見えない。ムイ子山は、上部がムイ(箕・農作業に用いられた)を逆さに被せたような形からその名があり、この特徴のある山の上部は札幌市南区から眺望できる。松浦武四郎の著作などに多く登場し、明治6年に開拓使が着手している三角測量は「ムイ子岳」の名を用いている。上述のように「墨絵」にも無意根山と見られる山が描かれているにもかかわらず、「ケナシ山」など全て別の山の名前が記されているのである。

「石狩川ヤウスハヨリ川上諸山ヲ望」(33024 - 14)の「ケナシ山」は、朝里岳(1,281 m)のあたりに描かれており、小樽市の毛無山(548 m)や余市町・小樽市にまたがる毛無山(650 m)などの現在の毛無山とは、別の山である。このように、「墨絵」で言う「ケナシ山」は、特定の山ではない。

少なくとも船越は、「無意根山」を用いず、その周辺の山々を含めて漠然と「ケナシ山」と記載している。これは、「ケナシ下段」「ケナシ上段」という表記でも明らかで、それは、船越というより、船越に山名を教えたであろうアイヌの認識が反映されているのかもしれない。

3) 胆振管内

①トキサラムフ

「勇拂郡之内字トキサラムフ真景」(33025 - 06)

トキサラムフ川は、苫小牧市植苗にあるニドムクラシックゴルフ場のあたりからウトナイ湖の西側に流入している川である。松浦武四郎は、「トキサラムフナイ、トキサラとは沼の耳と云儀なり。また、東岸まゝ

ウツナイの上樺原を行に、しばしにて、トキサラムフ、是東岸に有る小川、本名メナシキサラとも云よし、過て行やまた右のかた ウツナイフト」と記している（『戊午日誌中』松浦 1985）。そのほか「トウキサラ」の表記も見られる（『松浦山川図』松浦 1988）。「ツキサラムフ（To-kisar-oma-p）沼に・耳がある・もの（川）」は、「川が沼の奥に耳のように入り込んでいる」（中川 1985）の意味とされる。

松浦武四郎の「メナシキサラ」は、「メナシ（東側の）・キサラ」と解すことができ、江戸時代の主たる通行路は沼の東側に位置していたことを示しているものと考えられる。しかし、「墨絵」が描かれた頃には沼の西側に開削された札幌本道が主要道路となっていたと考えられる。「墨絵」には電信柱が描かれていることから見ても、この絵は沼の西側の札幌本道を描いているものと考えられる。

4) 空知管内

①中川山、中川

「七年四月廿四日エンカルシスヨリ眺望札幌ヲ望」（33024 - 02）

「明治七年四月廿六日寫 圓山村之内在モイワ東北面眺望之真圖」（33024 - 03）

中川山が、現在のどの山にあたるのか特定はできない。しかし、札幌の藻岩山からの遠望で北東の方向に描かれ、左にマシケ山（暑寒別岳・1,492 m）、右にユウハリ（夕張岳・1,668 m）を置くこと、暑寒別連山よりも遠くに描いていることから、音江山（796 m）やイルムケツ山（864 m）がある幌内山地の山と思われる。

アイヌは、石狩川本流の神居古潭より上流部の人々を、ペニウングル（上川の人）と呼び、神居古潭より南の当別あたりまでの人々を、パナウンクル（中川の人）と言っていた。『西蝦夷地石狩場所絵図』²⁶には、空知川の河口に「中川番屋」を描いている。

②ヲタウスナイ、ハンケシヨフヲマナイ、ヲタウス

「空知郡ヲタウスナ井川上 字ハンケシヨフヲマナ井ノ滝 高凡二丈余」（33025-19）

「空知郡字ヲタウスナ井川上」（33025-20）

「樺戸郡字ヲシラリカ タツコフ山ヨリ眺望 南一方」（33025 - 26）

「空知郡ヲタウスナ井川上 字ハンケシヨフヲマナ井ノ滝 明治六年十月十日」（33025 - 19）のうち「ヲタウスナイ」は、現在の歌志内市街付近の地名である。『松浦山川図』（松浦 1988）でヲタシナイ、ハンケヲタシナイがある。これが現行図ではパンケウタシナイ川とベンケウタシナイ川となっているので、「ヲタウスナ井」は、パンケウタシナイ川にあたると思われる。

パンケウタシナイ川は、パンケオタウシナイ川ともいわれ、「パンケ（下の）・オタ（砂）・ウシ（多い）・ナイ（川）」で、（中略）パンケは歌志内側のパンケオタウシナイのパンケ（上の）に対するもので、石狩川本流に合流する地点が本流の川上か川下かで区分したものの。（上砂川町編 1988）とされている。

また、ヲタウスナイ川上流の「ハンケシヨフヲマナ井」は、『松浦山川図』（松浦 1988）の「ハンケホコマナイ」とある枝川にあたるようで「panke-so-pok-oma-nay 下手の・滝（又は岩）・の下・にある・川」だったのではないかと。『仮製5万分1図』²⁷で「パンケソーポコオマップ」とある枝川がこの「ハンケシヨフヲマナイ」にあたり、これは現行図で歌志内市から砂川市を流れる西山沢川である。語源からすれば、「ハンケシヨフヲマナ井」に滝があって不思議はないのだが、「大正7年2万5千分の1地形図」には滝の記載がない。現地を確認していないので、滝の有無は不明である。

なお、「空知郡イコシユンヘツ水源 字ヘト、ルウスへ 此岩石炭脈鉞」（33025 - 25）の左端の山の遠景に書いた「ヲタウス」は、パンケウタシナイ川の源頭にある辺毛山（811 m）のあたりだろう。

③トイソ

「夕張郡夕張川筋字トイソト云 土人為登舟此処荷ヲ揚シ空船ニテ登ル」（33025-21）

「トイソ」は、『蝦夷語地名解』（永田 1891）のなかで、「（前略）…クン子トー 黒沼、トイソー 土瀑、クッ

タラ 虎杖、イコマナイ 鹿川（後略）…」と夕張川の川口から上流に向かって列記された地名のなかに見られる。同書で語源を「Toi so 土瀑」としているが、「toy-so 土の滝」（土を削って流れる滝）の意か。千歳市、恵庭市にも「トイソウ」はあり、いずれも急流に係のある地名と考えられている（長見 1976、千歳市史編さん委員会編 2010）。

夕張川筋の「トイソ」は、『蝦夷語地名解』（永田 1891）の他、史料には見えず、その位置は近傍の地名などから推定する他ない。まず、トイソの次のクッタラは、「仮製5万分1図」に旧夕張川に注ぐ「クッタラ川」と見える。「クッタラ」は、前出『松浦山川図』にも「クツタル」とあり、旧夕張川に流入する「イコマナイ」の下流に描かれている。この付近に旧夕張川北側の支流は他になく、「クッタラ川」と「イコマナイ（川）」は、同一の川だと考えられる。おそらくクツタルは、クツタル川（イコマナイ川）と旧夕張川との合流点付近の地名であり、先の『蝦夷語地名解』の記載順から「トイソ」は、その下流側に位置していると考えられる。「大正5年5万分1地形図」²⁸で見ると、クツタリ川と旧夕張川の合流点から下流の「ヂッコ渡」までの間が最も可能性が高い。現在の地名では栗山町岐阜から長沼町三区を経て南幌町青葉自治区付近までの夕張川沿岸のいずれかと推定される。

④アノロヌツフ

「夕張郡字ヤラケナ井ノホリヨリ東北眺望」（33025-23）

阿野呂川上流の高原地帯。アノロは、「アノロタルマイ岳」でも見られたが、こちらのアノロは、栗山町を流れる阿野呂川である。『蝦夷語地名解』（永田 1891）は「An ruru アン・ルル 山向フノ海岸」『今「アンヌロ」又「アナル」ト云フ「遠キ山向フノ海辺」ト云フ義』と解しており「海の方」の意か。『北海道の地名』（山田 1984）では、「もしかしたらアノロ（an-or 鷲捕りの雪穴あるいは小屋・の処）の別な意味だったかもしれない。」との解釈も示している。

⑤ヤラケナキノホリ

「夕張郡字ヤラケナ井ノホリヨリ東北眺望」（33025-23）

この絵の画面手前に描かれた小山は無名山（226 m）、その真北に山頂部が剣先のように尖っている鉢盛山（1,473 m）が見えるので、馬追山丘陵中央の澁台（しずかだい・272.8 m）にあたる。澁台は北海道の天測点8ヶ所の1つであるが、現在の山頂一帯は、松の木で覆われているので、周囲の展望はできない。

明治6年から9年にかけて、開拓使による三角測量の基本調査が行われており、船越らが登った当時は、現在より山頂に登りやすかったように思われる。

ヤラケナイは、馬追丘陵から由仁町本町の市街を通り夕張川に注ぐ小川で、今のヤリキレナイ川。地形図にこの川名は記されていないが、道路沿いに立つ大きな看板に書かれ、アイヌ語由来の珍名のひとつとして知られている。松浦武四郎の記録（『巳手控』松浦 2004）や『松浦山川図』（松浦 1988）にイヤリキナイ、「仮製5万分の1図」にヤラケナイの川が載っており、幕末から昭和初期にかけて作成された地図に、「イヤリキナイ」、「ヤラケナイ」、「ヤルケナイ」と記されている。

語源はアイヌ語の「イ・アルケ・ナイ（i-arke-nay）そのの・片割れ・の川」。往時のヤリキレナイ川は、川口で由仁川と合流し、夕張川に注いでいた。アイヌはこの由仁川とイヤルキナイを双生児の川と考えていたようで、これが第二次世界大戦後にいつしかヤリキレナイ川の珍名で呼ばれるようになった（由仁町史編集委員会編 1973）。

⑥キモンタツコフ

「樺戸郡之内字ヲシラリカ タツコフ山ヨリ東南眺望」（33025-27）

この絵の右手中央に書かれた「キモンタツコフ」は、「キムン・タプコブ（kim-un-tapkop）山・にある・瘤山」と解される。この山は、「墨絵」に描かれた位置からみると現在の石山（237 m）にあたる。『植民地撰定報文』（北海道編 1891）にサンケタツコフ山、『樺戸・雨籠・上川三郡略図』（旭川市編 1959）にサンケタツコフ山と記載されている山である。

「サンケタツプコツプ (sanke - tapkop) 突き出す・ぼこんと盛り上がったような感じの山」は、『砂川市史』(砂川市編 1971)によると、狩猟の場であつたらしく、開拓当時はアイヌがよく熊を取りに出掛けて行った。明治26年頃から採石が始められ、それにちなんで石山という名で呼ばれるようになったという。

『砂川市史』は、その奥にある山を「マクンタプコプ (mak-un-tapukopu) 奥にある・ぼこんと盛り上がったような感じの山」としてサンケタツプコツプと並べ、現在の名前を前者が神威岳、後者を石山と説明している。マクンタプコプ(神威岳)の東と西の斜面に「かもい岳スキー場」があり、また、この山を地元の人は、ポロカムイとも呼んでいたようである。

⑦イコシユンヘツ川、ヘトルウスヘノホリ、ホンナ井ヘツフト

「空知郡イコシユンヘツ川上ホンナ井ヘツフト」(33025 - 24)

「空知郡イコシユンヘツ水源 字ヘト、ルウスヘ 此岩石炭脈鉞」(33025 - 25)

上記2点の表記にある「イコシユンヘツ川」は、「仮製5万分の1図」に「イクシュウンペツ」があり、現在の幾春別川としてよい。スケッチ位置は、幾春別川北岸の支流奔別川の川口のやや下流側付近と思われる。

また「ヘトルウスヘノホリ」「ヘト、ルウスヘ」の位置は、奔別川と五の沢川の二股の北東にある花山(412 m)の北東に続く尾根(約460 m)であろう。アイヌ語の意味を推定すると、「pet-utur-un-pe 川・の間・にある・もの」か。「もの」はこの場合「山」だろう。類似の山名は、鹿追町の「北ペトウトル山」「南ペトウトル山」「ペトウトル」、また、新十津川町と三石町にもある。

「空知郡イコシユンヘツ川上ホンナ井ヘツフト」(33025-24)の「ホンナ井ヘツフト」は、現在の三笠市奔別。「仮製5万分の1図」に「ポンペツ」とある。「ポンペツ (Pon-pet) 小さい・川」(山田1984)の意か。「フト」は、「フツ (put)」で「川口」のこと。

⑧ピンネシリ、クマ子シリ (33025 - 26)

「樺戸郡字ヲシラリカ タツコフ山ヨリ眺望 南一方」(33025-26)

ピンネシリ(チセネシリ・1,100 m)の「Pinne-sir 男・の山」と夫婦の「matne-sir 女・の山」は、東隣りに並ぶ待根山(マツネシリ 1,002 m)である。チセネシリは、アイヌの竪穴形式の家「トイ・チセ」(土・の家)で、地面を掘ってその上に屋根を乗せた形が、台形に見えることから考えられる。

この絵のクマ子シリは現在の隈根尻山971 mで、アイヌ語は、「kuma-ne-sir 物乾し棚のような・山」、「山頂の平らに見える山」である(山田1984)。クマとは、「両方に柱を立ててその上に横棒を渡し、それに肉をかけて乾す施設」(知里1956)である。

⑨シユシユンヌツプ

「樺戸郡字ヲシラリカ タツコフ山ヨリ眺望 南一方」(33025 - 26)

新十津川町に土寸川(しすんがわ)、土寸、小鷲峻山、鷲峻山の地名がある。シユシユンヌツプのススウンは「susu-un 柳・ある」、ヌツプ(nup)は「原野。平地。」の意(中川1985)。

⑩ヲシラリカ

「樺戸郡字ヲシラリカ タツコフ山ヨリ眺望 南一方」(33025 - 26)

「樺戸郡之内字ヲシラリカ タツコフ山ヨリ東南眺望」(33025 - 27)

上記2点の表題にあるヲシラリカは、雨竜町にある地名、川名である、尾白利加川と石狩川の合流点を尾白利加太といい、「仮製5万分1図」では、ここを中心とする地域に尾白利加と表示されている。

尾白利加川は、雨龍川と石狩川の合流点のすぐ南で石狩川に入る川。永田方正は、「O shirar'ika オシラリカ。岩川。川尻二に岩アリ其上ヲ流ル義」とした(永田1891)。これに対し、山田秀三は、『「オシラリカ o-shirar-ika そこ(川尻)で・岩を・越す(川)」の意であつたらう。(中略)この辺りもオ「川尻」或いはオ「そこで」という意味であつたのかよく分からない。』と書いている(山田1984)。

2010年4月に現地を見たところ、橋の架け替えや河川改修により、永田はもとより山田が見たところからも大きく変貌しており、その当否は判断できなかった。尾白利加川の下流一帯は、広大な扇状地形をなし、現在は田畑として利用されている。往時の川尻はこのあたりにあったことも考えられる。あるいは、尾白利加川には岩のある支流があって、それが本流の名に置き換わったのかもしれない。

類似の地名は、旭川のチカブミ「川の中の岩」、白糠のシラルカ「平磯の岸」、八雲のシラルカ「岩礁が溢れる」などがある。

① タツコフ、タツコフ山

「樺戸郡字ヲシラルカ タツコフ山ヨリ眺望 南一方」(33025 - 26)

「樺戸郡之内字ヲシラルカ タツコフ山ヨリ東南眺望」(33025 - 27)

上記2点の表題にそれぞれ「タツコフ山」という地名が見られる。タプコブ (tapkop) は、「丸い瘤状の山」「ぽこんと独立して立っている丸山」の意である。この場所について調べてみよう。

まず、「樺戸郡字ヲシラルカ タツコフ山ヨリ眺望 南一方」(33025 - 26)の中央の右に「ウラシナイノホリ(浦白山)」、「クマネシリ(隈根尻山)」、「チセ子シリ(ピン子シリ)」が並んでいる。「クマ子シリ」手前の「シヲシユンタツコフ」は現在の小鷲峻山(387m)と見られる。この小鷲峻山の右(南南西)奥に描かれた小山は、現在の壮志岳(683m)である。絵の右下に、ぽこんと盛り上がった小山(412.4mの無名山)と峰続きのやや平坦な丸い形の小山が描かれ、ここに2人の姿が見える。このあたりがスケッチした場所と推定できる。ここに描かれた山々の高さは、数倍に誇張されている。

船越は高畑利宣とともに、明治8年6月に石狩川筋夕張空知樺戸方面に地理調査のため出張しているので、このとき描いたのであろうか。なお、412.4mの無名山は、大正3年7月に三角点「四寸達瘤(しすんたつこぶ)」名で造標されている²⁹。

つぎに、「樺戸郡之内字ヲシラルカ タツコフ山ヨリ東南眺望」(33025 - 27)をスケッチした場所であるが、右端のキモンタツコフ(石山・237mか)の背後に山並みが見えているので、それよりかなり高い位置から眺めていることになる。スケッチ場所の左手前(北東側)は奥盤ノ沢(339m)、中央の眼下に幌加尾白利加川、その延長線上の東方向(絵の中央)にイルムケツ山(864m)などの山塊を大きく置いている。幌加尾白利加川の右に志寸川、その右側に石狩川、右下に少し見える丸い山が小鷲峻山(387m)、「墨絵」に「字ヲシラルカタツコフ山より東南眺望」と書いているので、このスケッチ場所は「樺戸郡字ヲシラルカ タツコフ山ヨリ眺望 南一方」(33025 - 26)とほぼ同じ場所と思われる。しかし、ここからは、夫婦山(264m)などの山が見えるはずなのだが、「墨絵」には描かれていない。おそらくこれらの山は省略したのだろう。

船越らはこの412.4mの山へ、どこから上ったのであろうか。大正3年の三角測量簿「四寸達瘤」³⁰に書かれた順路をみると、北側の幌加尾白利加川上流のパンの沢から約2里のルートと、南側の徳富川支流の学田沢川を経て約4里のルートの2つが見える。明治8年の調査では、案内のアイヌから聞いて、このどちらかを使ったのであろう。筆者も2010年、この2コースに挑戦したが、道のないところをヤブ漕ぎで往復することの厳しさを痛感した。

5. 「札幌近郊の墨絵」と地名

河野常吉は、船越について「測量を善くするを以て山野を跋涉し、未開地を測量す傍ら前人未踏の勝境を探り靈妙の筆を以て之を写し、行囊を満して帰る故に其稿本の存するもの多し」と記している(三浦2003)。

これを素直に読めば、「墨絵」などの絵は、未開地測量業務の傍ら「趣味」として描かれた、ということになるであろう。しかし、「墨絵」には、既に見たように数多くの地名が記入されている。果たして趣味の範囲で「前人未踏の勝境を探り靈妙の筆を以て之を写」した絵に、これほど詳細な地名は必要だったのだろうか。

まず、注意しなければならないのは、船越が四条流円山派に属していたという点である。四条流円山派は、写生を重視する南画の一派である。近世になり日本の画壇では、中国の風景を題材にした典型的な山水画から離れ、日

本の風景を元に描いた風景画が描かれるようになる。こうした日本風の山水画は、南画を中心に流行し、表題に「真景」とつけられることが多かったことから「真景図」と総称されるようになった。「墨絵」の表題には「真景」「真図」「真写」という言葉が見られるが、船越にとって、自らが描く風景画に「真景」「真図」と題するのはごく自然なことであつたと考えられる。また、真景図では、地名、施設名を画面に記載することが広く行われており、船越もそうしたことについて当然のことと考えていたに違いない。

次に彼の仕事から考えてみよう。船越が「画工」として残した仕事には、大きく分けて樽前山噴火状況調査のような調査及び報告に添付する画像（絵画）の作成と「札幌郡西部図」などの測量・地図の作成の2種があつたと考えられる。

前者の代表である「樽前岳噴火之図」には、6葉にわたって樽前山噴火の状況が時間を追って示されている。この「樽前岳噴火之図」と、その元となつた「墨絵」のスケッチには、ともに主要な山名などの地名が記入されているが、「樽前岳噴火之図」のような調査報告の挿画を作成する場合、地名のような地理的情報は不可欠であつたと考えられる。

残念ながら後者の仕事と「札幌近郊の墨絵」に見られるような絵との関わりを、あまり明確にすることはできない。しかし、明治8年6月の「夕張他三郡復命書」を理解する上で「空知郡ヲタウスナ井川上字ハンケシヨフヲマナイノ滝 高凡二丈余」（33025 - 19）などの絵が、ひじょうに有用であることは既に指摘したとおりである。

また、三角測量による測量事業がほとんど進んでいないなかで、船越らの近世以来の測量術による開拓地の位置や河川を示す地図は、正確性にやや欠けるものであつたとしても実用性は高かつたはずである。そうした地図を作成するにあつて、多くの地名が記入された船越のスナップ写真的な絵は、開拓地や山、川などの相対的な位置関係を確認する上で重要な資料となつたことは、間違いないであろう。

さて、それでは船越は「真景図」を描くなかで当然のこととして地名を記載していったのか、あるいは仕事上の必要に迫られて地名を記録したのだろうか。

おそらくその答えは、両方ということになるのであろう。なぜなら、船越が開拓使で担つた「画工」という仕事そのものが、実際の風景を描写する「絵画」と地名という地理的情報を記録する「地図」をつなぐものであつたからである。

おわりに

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園に所蔵される船越長善画「札幌近郊の墨絵」について、概要の紹介と若干の分析を行った。しかし、54点の墨絵から、引き出し得る情報はまだまだ多い。今後、さらに個々の墨絵に描かれた内容を分析する必要がある。今回の分析にあたり、多くの方々から「墨絵」についての所見を頂いた。その方々はいずれもその情報量の多さ、出来栄の良さを指摘し、早期の公開を望まれていた。もともと、「墨絵」は、田島らによる調査の後、しばらくの間 Web 上で公開されていた。残念ながら現在見ることはできないが、「墨絵」の高い資料価値にかんがみて、公開の再開を願うものである。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、北海道大学付属図書館北方資料室、北海道立文書館、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園の諸機関には、資料調査等にご協力をいただきました。特に北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園加藤克学芸員には、資料の閲覧など様々な点で便宜を図っていただきました。また、塚田敏信、荒井宏明、寺田昭彦の諸氏には、「墨絵」に描かれている場所や内容についてご教示を頂きました。椎名次郎氏には、絵画としての「墨絵」についてご教示いただきました。井口利夫氏には、開拓使時代の地図、地名について多くの貴重な示唆を頂きました。最後に、日頃から資料検索などについての協力や励ましを頂いている石狩市民図書館、いしかり砂丘の風資料館の同僚、諸先輩に感謝の意を表させていただきます。

引用・参考文献

- 旭川市編. 1959: 樺戸・雨龍・上川三郡略図, 『旭川市史第1巻』
- 旭川市史編集会議編. 1993: 夕張空知樺戸三郡出張山林川沢地理水理等調査及ヒ開拓見込ノ件上申, 『新旭川市史』第6巻:644-650p
- 江別市編, 1970: 『江別市史』上巻:233p
- 加藤克. 2001: 北海道大学農学部博物館所蔵絵画資料の歴史的検討, 『北海道大学文学研究科平成12年度プロジェクト研究報告書』
- 上砂川町編. 1988: 『新上砂川町史』
- 河野常吉. 1979: 船越長善, 『北海道史人名字彙』下・北海道出版企画センター
- 札幌区役所編. 1911: 『札幌区史』
- 札幌市教育委員会編. 1977: 札幌地名考, 『さっぽろ文庫』1
- 札幌市教育委員会編. 1985: 札幌生活文化史〈明治編〉, 『さっぽろ文庫』別冊, 42p
- 札幌市教育委員会編. 1987: 『新札幌市史』資料編2:661～662p
- 札幌市教育委員会編. 1991: 『新札幌市史』, 通説二:593p
- 白石恵理. 2001: 開拓使の絵師・船越長善とその作品について, 『北海道大学文学研究科平成12年度プロジェクト研究報告書』
- 白野仁. 1984: 『白野夏雲』・北海道出版企画センター
- 砂川市編. 1971: 『砂川市史』
- 高倉新一郎. 1976: 船越長善 胆振国勇払郡樽前岳噴火図, 『新しい道史』, 68号:24-25p
- 高倉新一郎編. 1982: 「附図蝦夷地里数書入地図其一」, 『北海道古地図集成』・北海道出版企画センター
- 高倉新一郎. 1987: 『挿絵に拾う北海道史』・北海道出版企画センター
- 田島達也ほか. 2001: 北海道大学農学部博物館の絵画 - 博物画・風景画・アイヌ絵・洋画 -, 『北海道大学大学院文学研究科プロジェクト研究報告書』
- 橘文七編. 1957: 『北海道史人名辞典 第三巻』, 北海道文化資料保存協会 254-255p
- 千歳市史編さん委員会編. 2010: 『新千歳市史通史編上巻』
- 知里真志保. 1956: 『地名アイヌ語小辞典』北海道出版企画センター
- 苫小牧市編. 1975: 『苫小牧市史 上巻』
- 中川裕. 1985: 『アイヌ語千歳方言辞典』草風館
- 永田方正. 1891: 『北海道蝦夷語地名解・初版』(1984年草風館版を使用)
- 長見義三. 1976: 『ちとせ地名散歩』北海道新聞社
- 早川禎治. 2000: 『手稲山紀行 傷ついた自然の側から』中西出版
- 平凡社編. 2000: 札幌本道, 『北海道の地名』, 131p
- 北海道編. 1891: 空知郡ヲトシナイ原野 地理, 『北海道植民地撰定報文』
- 北海道編. 1936-37: 『新撰北海道史』
- 北海道編. 1971: 「明治六年札幌市街之真景」口絵解説, 『新北海道史』, 第三巻
- 北海道編. 1989: 『新北海道史年表』北海道出版企画センター
- 北海道開拓記念館編. 2002: 描かれた北海道 - 18・19世紀の絵画が伝えた北のイメージ -, 第54回特別展図録
- 掘淳一. 1977: 北海道の地図略史, 『日本の古地図⑮ 札幌』・講談社
- 松浦武四郎. 1977: 『石狩日誌』『松浦武四郎紀行集 下』富山房
- 松浦武四郎. 1985: 『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌 上・中』北海道出版企画センター
- 松浦武四郎. 1988: 『東西蝦夷山川地理取調圖』草風館

- 松浦武四郎 . 2004 : 『巳手控』, 『松浦武四郎選集』四 北海道出版企画センター
- 山田秀三 . 1965 : 『札幌のアイヌ語地名を尋ねて』 楡書房
- 山田秀三 . 1984 : 『北海道の地名』・北海道新聞社
- 由仁町史編集委員会編 . 1973 : 『由仁町史』
- 三浦泰之 . 2003 : 史料紹介 河野常吉資料「絵画集」, 『北海道開拓記念館調査報告』42 : 63 p
- 三浦泰之 . 2006 : 開拓使に雇われた「画工」に関する基礎的研究, 『北海道開拓記念館研究紀要』, 34:81p
- 吉岡道夫 . 1989: 船越長善, 開拓使時代, 『さっぽろ文庫』50

¹ 「北海道石狩州札幌地形見取図」北海道大学附属図書館北方資料室所蔵・軸物 124

² 「明治六年札幌市街之真景」北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園所蔵・標本番号 39563

³ 『北海道史人名辞典』と『北海道史人名字彙』で船越の履歴がほとんど同じであることについては、高倉新一郎「北海道史人名字彙について」『北海道史人名字彙 上』所収)を参照いただきたい。

⁴ 『日誌』(北海道立文書館所蔵・簿書 679)

⁵ 『日誌』(北海道立文書館所蔵・簿書 679)

⁶ 『日誌』(北海道立文書館所蔵・簿書 679) 明治6年9月9日の項に「船越長善氏民事局近村絵図取調御用として本日出張之事」とある。

⁷ 注4『日誌』明治6年10月28日の項に「物産局博物課差免更民事局勸農課申付候事」とある。

⁸ 『明治十三年自一月 免職物故並他官轉任ノ分履歴書綴』(北海道立文書館所蔵・簿書 3809)
「同年十二月廿八日 金五百 積雪中測量格別勉勵ニ付為慰勞被下置候事」

⁹ 「札幌郡西部図」北海道大学附属図書館北方資料室所蔵・図類 1480

¹⁰ 「胆振国勇払郡樽前岳憤火之図」北海道大学附属図書館北方資料室所蔵・図類 1055

¹¹ 白石恵里は、「このスケッチはその下書きの一枚かもしれない。」と指摘している(白石 2001)。

¹² 「札幌郡各村地図」北海道大学附属図書館北方資料室所蔵・図類 206

¹³ 高畑利宣は、現在の京都府南区に生まれ、明治3年大阪の北海道物産会所に入り、翌明治4年に北海道に渡った。北海道では、開拓地の調査、測量業務が多く、明治5年の上川調査は良く知られている。民事局勸農課には、明治7年1月に配属された。

¹⁴ 船越については、注4前掲書に「同年六月七日 石狩川筋夕張空知樺戸地理為取調巡回申付候事 同年六月廿七日 事業多端之折柄格別勉勵ニ付為慰勞金壹圓貳拾五錢被下候事」とある。高畑については、「辞令(石狩川筋夕張空知樺戸地理為取調巡回申付候事)」(滝川郷土館所蔵高畑利宣文書・資料番号 63)

¹⁵ 「札幌近傍山林三等区分ノ件」『山林部書』(北海道立文書館所蔵・A4 / 306)

¹⁶ 注8参照

¹⁷ 『日誌』(北海道立文書館所蔵・簿書 679)

¹⁸ 注8参照

¹⁹ 「石狩国石狩樺戸両郡之内志別方面見取図」北海道大学附属図書館北方資料室所蔵・図類 21

²⁰ 「戸長旅費之義ニ付伺」『山林部書』(北海道立文書館所蔵・A4 / 306)

²¹ 注9参照

²² 「道庁20万分1地形図」:北海道庁作成が明治20~29年にかけて刊行。折り畳むため、版面が切り分けられており「実測切図」とも呼ばれる。

²³ 「仮製5万分1地図」:明治29~31年にかけて陸軍陸地測量部が刊行した地図。実際の測量は、北海道庁が行ったため、「仮製」となっている。

²⁴ 「2万5千分1地形図」大正7年北海道庁製作

²⁵ 『三角術測量北海道之図』北海道大学附属図書館北方資料室所蔵・軸物 111

²⁶ 『西蝦夷地石狩場所絵図』北海道大学附属図書館北方資料室所蔵・図類 349

²⁷ 注23参照

²⁸ 5万分1地図 大正5年製作。陸地測量部の測量により作成した最初の5万分1北海道地図

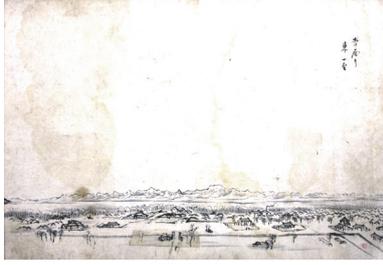
²⁹ 『点の記』国土地理院北海道測量部

³⁰ 注29参照

船越長善「札幌近郊の墨絵」表題一覧

標本番号	No.	表題	日付	備考
33024	01	本庁ヨリ東一望		
33024	02	七年四月廿四日エンカルシスヨリ眺望札幌ヲ望	明治7年4月24日	
33024	03	明治七年四月廿六日寫 圓山村之内在モイワ東北面眺望之真圖	明治7年4月26日	
33024	04	札幌六景之内渡島街晴雪		
33024	05	札幌六景之内官廳暮散		
33024	06	後志州石狩州堺ヲタルナ井ノ大滝 ヲタル新道往還ヨリ凡七丁南方高サ凡五丈余		
33024	07	札幌郡アシ、ヘツ水源大瀑布 高十丈横四丈 七年四月十四日真寫	明治7年4月14日	彩色
33024	08	札幌郡アシ、ヘツ水源三筋滝之内 高五丈位羽、二丈五尺位		彩色
33024	09	札幌郡アシ、ヘツ水源三筋瀑布之内 右之滝 高三丈位		
33024	10	札幌郡モイレトウ之内東寄り		
33024	11	明治六年十一月十六日 雪中於初寒川尻ニテ鮭漁奇趣真寫	明治6年11月16日	
33024	12	石狩川鮭漁奇趣真寫		
33024	13	石狩川之内下花畔ヨリ川下ヲ望		
33024	14	石狩川ヤウスハヨリ川上諸山ヲ望		
33024	15	石狩湊同所出張所矢槍ヨリ見下シ		
33024	16	石狩郡石狩湊川上ヨリ川下ヲ望		
33024	17	札幌郡豊平川上字シユウナ井ハロヤン真寫 穴ノ川口ト云		
33024	18	自野石ト名ク夏雲ナルヘシ サツホロ川上 在定山水下半里		
33024	19	札幌郡豊平川支流一ノ沢口ノ滝 高三丈位		
33024	20	札幌郡豊平川上定山溪在東南方面札幌岳ニ接シ方位山ト名ク		
33024	21	札幌郡豊平川上定山壺里川下 字滝ノ沢及ヒ大走ト云		
33024	22	札幌郡豊平川支流ニソマツフ川上 左三里半高凡十五丈余		彩色
33024	23	札幌川上定山ヨリ北方十町余 白川二股真景 出水右ヲタルナイ 左白ヒカワ		
33024	24	札幌郡豊平川上定山溪ヨリ川下十丁程		
33024	25	ウス新道字中山峠ヨリケナシ上段ヲ望 此山有札幌郡後志國界		
33024	26	無題		
33024	27	明治六年十月九日サツホロ川水源ウス新道ケナシ山下タシニ登テ東北諸山眺望真寫	明治6年10月9日	
33025	01	明治六年十月十日 ウス新道筋ケナシ岳下段ヨリ西方眺望真寫	明治6年10月10日	
33025	02	札幌郡アシ、ヘツ		
33025	03	札幌郡之内ワッチ休泊所		
33025	04	千年川驛		彩色
33025	05	勇拂郡美々		
33025	06	勇拂郡之内字トキサラムマフ真景		
33025	07	二月十日午後四時トマコマイヨリ	明治7年2月10日	
33025	08	タルマイ噴火崩陥二月八日午後八時札幌ヨリ遠望 巳午ノ方直径凡十里余	明治7年2月8日	彩色
33025	09	甲戌二月十四日午前十一時 千年郡イサリ野中ヲ望	明治7年2月14日	
33025	10	千年郡千年川下流ヲサツトウ西南ヲ望 景色絶也、水流浅清シ、鷺鴨多		
33025	11	千年郡ヲサツトウ 鷺多シ		
33025	12	千年郡千年川下流ヲサツトウ真景		
33025	13	エヘツフトヨリ南西一望		
33025	14	在エヘツノ図山南一望		
33025	15	札幌郡石狩川筋エヘツ野南面真圖		
33025	16	札幌郡對雁村先エヘツフト奇趣真圖 八年十一月十日船越長善画	明治8年11月10日	彩色
33025	17	石狩川支流エヘツ川字サノイヘナ井土人雪中鮭漁真圖 十一月比盛之		
33025	18	空知土人飼熊ノ子		
33025	19	空知郡ヲタウスナ井川上 字ハンケシヨフヨマナ井ノ滝 高凡二丈余		
33025	20	空知郡ヲタウスナ井川上 此小瀑布岩石炭脈鉄 高三丈位		
33025	21	夕張郡夕張川筋字トイト云 土人為登舟此処荷ヲ揚シ空船ニテ登ル		
33025	22	夕張郡字マライノホリヨリ西ノ方眺望		
33025	23	夕張郡字ヤラケナ井ノホリヨリ東北眺望		
33025	24	空知郡イコシユンヘツ川上ホシナ井ヘツフト		
33025	25	空知郡イコシユンヘツ水源字ヘト、ルウスへ 此岩石炭脈鉄		彩色
33025	26	樺戸郡字ヲシラリカ タツコフ山ヨリ眺望 南一方		
33025	27	樺戸郡之内字ヲシラリカ タツコフ山ヨリ東南眺望		

図版：収録されている墨絵全点を掲載した。図版の番号は、表題一覧及び本文で表題の後に付した番号に対応している。



33024-01



33024-02



33024-03



33024-04



33024-05



33024-06



33024-07



33024-08



33024-09



33024-10



33024-11



33024-12



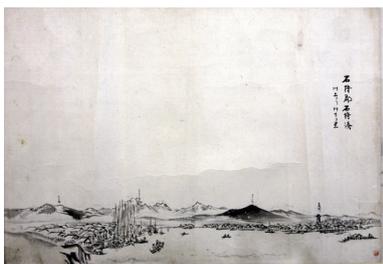
33024-13



33024-14



33024-15



33024-16



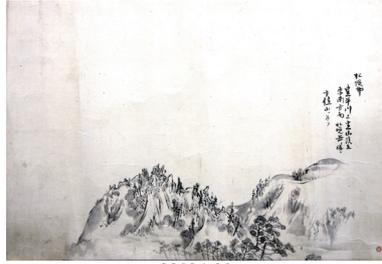
33024-17



33024-18



33024-19



33024-20



33024-21



33024-22



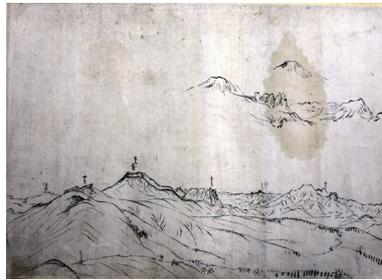
33024-23



33024-24



33024-25



33024-26



33024-27



33025-01



33025-02



33025-03



33025-04



33025-05



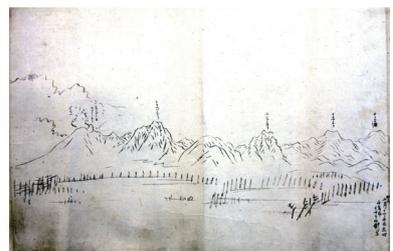
33025-06



33025-07



33025-08



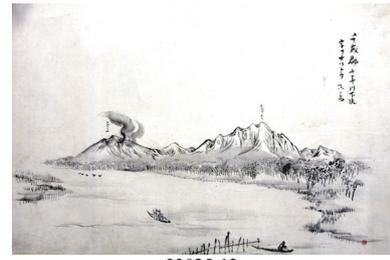
33025-09



33025-10



33025-11



33025-12



33025-13



33025-14



33025-15



33025-16



33025-17



33025-18



33025-19



33025-20



33025-21



33025-22



33025-23



33025-24



33025-25



33025-26



33025-27